# 渾沌　解答

## A　語句の意味と読み

**(1)** たちまち・あっというま（すばやいさま）。 ／★現代仮名遣いの読みは「しゅく」「こつ」。二字を合わせた「儵忽（倏忽）」も「たちまち・ほんのわずかな時間」の意。せわしなく、すばやいものの名になっている

**(2)** すべてがまじり合って、区別がつかないさま。物事がまだ分かれていない状態。 ／★本文の渾沌には、人間ならだれにでもある目・耳・鼻・口の穴がない。区別（けじめ）のない姿の帝の名

**(3)** あるとき。 ／★「ときどき・折にふれて」と訳す教科書もある。お使いの教科書に合わせること。現代語の「時に（ところで）」とはちがう

**(4)** もてなす・応対する。 ／★「待遇」「接待」の「待」。「まつ」と訳さない

**(5)** 恩・めぐみ。（渾沌から受けた手厚いもてなしの恩） ／★「道徳」の「徳」ではない。「徳に報いる」＝恩返しをする

**(6)** しちきょう／顔にある七つの穴。目二つ・耳二つ・鼻の穴二つ・口一つ。 ／★「竅」＝穴。歴史的仮名遣いの「けう」は、現代仮名遣いでは「きょう」

**(7)** 見る・聞く・食べる・息をする（こと）。 ／「視」＝見る、「聴」＝聞く、「食」＝食べる、「息」＝呼吸する。七つの穴の使いみちを四字で並べた言い方

## B　句法

**(8)** 「〜とする・〜という」の意。「南海の帝を儵と為し」＝「南海の帝を儵という（儵という名である）」。 ／白文は「南海之帝為儵」。「為」は「なす・なる・たり・ため」など読みの多い字なので、文の形で見分ける

**(9)** 謀レ報二渾沌之徳一（「謀」にレ点、「報」に二点、「徳」に一点） ／★読む順は「渾沌→之→徳→報→謀」。「徳」から「報」へは二字以上へだてて返るので一・二点、「報」からすぐ上の「謀」へは一字返るのでレ点（三点にはしない）。「虎穴に入らずんば」の「不レ入二虎穴一」と同じ形。「渾沌の徳に報いること」を「謀る（相談する）」

**(10)** 手段・方法を表す。「それで・それを使って（〜する）」の意。 ／★白文は「以視聴食息」。「何で」にあたる語が「以」の下から省かれ、前の語句を受けている形

**(11)** 「人はみな〜なのに、これだけは〜」と、多くの者と一つのものとを対比させる関係。「独り」＝ただ〜だけ（限定）。 ／★白文は「人皆有七竅……此独無有」。「皆」と「独」、「有」と「無」が向かい合っている

**(12)** 「ためしに〜してみよう」。（ためしにやってみようという意志・提案） ／★「嘗試」は二字で「こころみに」と読む。「嘗」一字のときは「かつて（以前に）」と読むことが多いので混同しない。「ん」は意志の「む」

**(13)** 読まない置き字として扱い、直前の「七日」に送り仮名「にして」をつけて表している。働きは順接で、「〜して・そして（その結果）」とつなぐ。 ／「而」は順接にも逆接にもなる字。ここは「七日たって、そして」と前から後へ自然につながる順接

## C　主語・指す内容

**(14)** もてなしたのは渾沌。「之」＝儵と忽（南海の帝と北海の帝）。 ／★文頭の「渾沌」が主語。もてなされた二人を「之」で受けている

**(15)** 七竅（顔にある七つの穴）。 ／直前の「人皆七竅有りて」を受けている。その穴で見る・聞く・食べる・息をする

**(16)** どちらも渾沌。（⑬は、渾沌の体〈顔〉に穴をあけることをいう） ／★儵と忽の会話の中のことば。「人間はみな穴があるのに、この渾沌だけはない。ためしに（渾沌に）穴をあけよう」

**(17)** 儵と忽。 ／★穴をあけたのは儵と忽、あけられたのが渾沌。相談した二人が、そのまま実行している

## D　口語訳

**(18)** 儵と忽とは、あるとき、いっしょに渾沌の（治める）土地で出会った。 ／⑤「相与に」は「あいともに」と読み、「いっしょに」の意。「遇ふ」＝出会う。※「時に」を「ときどき」と訳す教科書もある

**(19)** 渾沌は二人（儵と忽）をたいそう手厚くもてなした。 ／「甚だ」＝たいへん・非常に。「善し」＝よい→（もてなしが）手厚い

**(20)** 人間にはみな七つの穴があって、それで見たり聞いたり食べたり息をしたりしている。ところが、この渾沌だけには（その穴が）ない。

**(21)** （儵と忽は）一日に一つずつ穴をあけていったところ、七日目に渾沌は死んでしまった。 ／★「日に」＝一日ごとに（毎日）。「鑿つ」＝穴をあける。穴は七つなので、七日目にちょうど全部あいたことになる

## 渾沌　解答／現代語訳

### E　内容・記述

**(22)**　人間にはみな、見る・聞く・食べる・息をするための七つの穴があるのに、渾沌にだけはそれがないので、渾沌にも七つの穴をあけてやること。　／二人の会話「人皆七竅有りて……嘗試みに之を鑿たん」の内容をまとめる

**(23)**　渾沌は、穴がなく、すべてがまじり合って区別のない姿のままでいることが本来のあり方だったのに、人間と同じ七つの穴をあけられて手を加えられ、その本来のあり方をこわされてしまったから。

**(24)**　儵・忽＝すばやく、せわしなく動きまわる人間のはたらき（知恵や作為＝人為）。渾沌＝区別がなく、手の加わっていない、あるがままの自然。　／細かい説明は教科書によって分かれる。古い注釈には、儵を「有」、忽を「無」、渾沌を「有でも無でもないもの」とするものもある。お使いの教科書に合わせて

**(25)**　良かれと思って手を加えると、かえって相手の本来の姿をこわしてしまうということ。（三十九字）　／郭象（かくしょう）の古い注は、この話に「為す者は之を敗る（手を加える者は物をこわす）」と一言だけ記している

### F　文学史・思想

**(26)**　道家／老荘思想。　／『荘子』の内篇は「応帝王」篇で終わる。この渾沌の話は、その最後に置かれている

**(27)**　無為自然（むいしぜん）。　／「無為」＝人の手でことさらに何かをしないこと。仁・義・礼など人の定めた教えを重んじた儒家（孔子・孟子）の考え方と対比される

**(28)**　物事が入りまじっていて区別がつかず、はっきりしないさま。例：「情勢は混沌としている」。　／★本文の渾沌は「区別のない、あるがままの状態」という、むしろ良い意味の名。今は「先が見えない・ごちゃごちゃしている」という意味で使うことが多い

### 【現代語訳（全文）】

南海の帝を儵といい、北海の帝を忽といい、中央の帝を渾沌という。儵と忽とは、あるとき、いっしょに渾沌の治める土地で出会った。渾沌は二人をたいそう手厚くもてなした。

儵と忽は、渾沌から受けた恩に報いようと相談して言った。「人間にはみな七つの穴があって、それで見たり聞いたり食べたり息をしたりしている。ところが、この渾沌だけには（その穴が）ない。ためしに（渾沌に）穴をあけてみよう。」

そこで一日に一つずつ穴をあけていったところ、七日目に渾沌は死んでしまった。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる